

上野廃寺跡発掘調査報告書

和歌山市上野所在

昭和61年3月

和歌山県教育委員会

上野廃寺跡発掘調査報告書

和歌山市上野所在

昭和61年3月

和歌山県教育委員会

上野廃寺跡発掘調査報告書正誤表

頁	行	誤	正
1	1～2	計画実施された	計画・実施された
2	20	拡がり	広がり
5	33	半截平瓦	半截平瓦
8	3	縮少	縮小
17	15	出目	出自

序

本書に纏めた史跡上野廃寺跡は、県下唯一の双塔寺院跡として早くから人々の耳目を集め、大和藤原京の本薬師寺、平城京の薬師寺との伽藍の類似から、紀伊薬師寺とも呼ばれてきた奈良時代建立の寺院跡であります。

本県教育委員会では、遺跡の保護資料作成のため紀伊国分寺跡をはじめ、重要遺跡確認調査として古代寺院跡の発掘調査を実施してまいりました。

昭和58年度より発掘調査に着手してまいりました上野廃寺についても多大の成果をあげることができました。ここに、その発掘調査結果をとりまとめて報告書を刊行いたします。本書が県民の皆様のみならず、学界にも貢献することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の遂行、本書の刊行に際し、御理解と御厚意を賜った関係各位に対し、改めて厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 中 川 昭

例 言

1. 本書は、和歌山県教育委員会が昭和58年度から昭和60年度にかけて発掘調査を実施した、和歌山市上野に所在する史跡上野院寺跡の発掘調査報告書である。

なお、本書には、昭和42年に緊急発掘調査を実施した中門跡の調査成果を併せ収録した。

1. 発掘調査に際し、上野院寺発掘調査委員会を組織し、和歌山県文化財保護審議会埋蔵文化財部会の岡田英男、鍋島正信、興三郎、都山比呂志、藤沢一夫委員を発掘調査委員に委嘱した。
1. 発掘調査は、調査委員会の指導のもとに文化財課文化財第二係長純野眞晃、同主任森井保夫が担当し、調査事業の一部を社団法人和歌山県文化財研究会に委託して実施した。

また、昭和42年度の緊急発掘調査は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部森部夫氏および、県教育委員会社会教育課小賀直樹が担当した（所属は昭和42年当時）。

1. 本書の作成は、発掘調査委員会の指導のもとに藤井が当り、中門跡・廻廊跡・参道の報告は森・小賀両氏を頼むした。
1. 発掘調査の遂行ならびに本書の作成にあたっては奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部の指導・協力を得た。
1. 本書に使用した昭和41年撮影の航空写真の掲載については和歌山市計画課の協力を得た。

目 次

第1章 調査経過	1
1 発掘調査に至るまで	1
2 調査概要	2
第2章 調査成果	2
1 位置と環境	2
2 地形と伽藍配置	3
3 遺 構	3
(1) 金 堂	3
(2) 東 塔	5
(3) 西 塔	5
(4) 講 堂	6
(5) 中 門	7
(6) 廻 廊	8
(7) その他の遺構	9
4 遺 物	9
(1) 瓦 埴	9
(2) 仏 像	13
(3) 飾り金具	14
(4) その他の金属遺物	14
(5) 土器類	14
第3章 総 括	16

図 面

- | | | | |
|-------------|-----------------|-------------|----------|
| 1 上野庵寺地形測量図 | 3 東塔跡・東西両塔心礎実測図 | 5 講堂跡実測図 | 7 中門跡実測図 |
| 2 金堂跡実測図 | 4 西塔跡実測図 | 6 講堂跡須弥壇実測図 | 8 廻廊跡実測図 |

図 版

- | | | |
|------------|-----------------|--------------------|
| 1 上野庵寺航空写真 | 1 周辺地形(昭和41年9月) | 2 須弥壇全景(南より) |
| | 2 金堂跡 | 10 講堂5 |
| 2 金堂跡1 | 1 正面階段(西より) | 1 須弥壇全景(正面・東より) |
| | 2 正面階段(南より) | 2 本尊台座基礎 |
| | 3 基壇北面と廻廊 | 3 須弥壇縁飾部 |
| 3 金堂跡2 | 1 礎石 | 11 中 門 |
| | 2 基壇東面 | 1 基壇縁南面と階段 |
| | 3 基壇敷基状況 | 2 基壇縁南面(西より) |
| 4 東 塔 | 1 心礎と正面階段 | 3 基壇縁東南部(東より) |
| | 2 心礎と礎石抜取り穴 | 12 廻 廊1 |
| | 3 正面階段(西より) | 1 講堂北部とり付(北より) |
| 5 西 塔 | 1 心 礎(東より) | 2 講堂北部とり付(北より) |
| | 2 礎石積出状況(北より) | 3 講堂南面とり付(東より) |
| | 3 東階段 | 13 廻 廊2 |
| 6 講 堂1 | 1 須弥壇周辺 | 1 中門東とり付部石垣 |
| | 2 東雨落溝・礎石等検出状況 | 2 金堂北側の礎石と雨落溝 |
| 7 講 堂2 | 1 東雨落溝 | 3 礎石・雨落溝・地覆(金堂北東部) |
| | 2 礎石等検出状況 | 14 その他の遺構 |
| | 3 基壇西面と雨落溝 | 1 木製灯籠跡 |
| 8 講 堂3 | 1 北面と廻廊 | 2 講堂北部素檼拵水溝 |
| | 2 北東隅座落溝 | 3 中門南縁階段と参道 |
| | 3 南面と廻廊 | 15 軒九瓦・軒平瓦 |
| 9 講 堂4 | 1 須弥壇全景(垂直写真) | 16 軒九瓦・軒平瓦細部 |
| | | 17 軒平瓦細部・隅木蓋瓦・片尾 |
| | | 18 九瓦・平瓦 |
| | | 19 瑤・差し替え瓦・廻廊の瓦 |
| | | 20 想像・金属遺物 |
| | | 21 土器類 |

遺物実測図

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 軒九瓦・軒平瓦拓本、実測図 | 4 仏像・金属遺物・土師器実測図 |
| 2 隅木蓋瓦・片尾・廻廊九瓦・平瓦拓本、実測図 | 5 土師器・黒色土器・須恵器・絲織・青磁実測図 |
| 3 九瓦・平瓦拓本、実測図 | |

挿 図 目 次

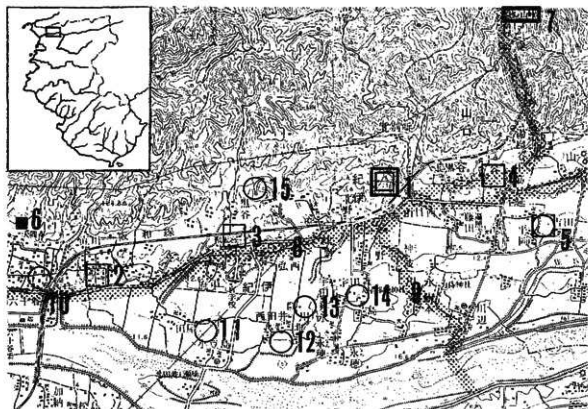
- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 上野庵寺の位置と周辺の主要遺跡……………1 | 5 中門跡発掘地点と中門推定区……………7 |
| 2 上野庵寺伽藍復原図……………4 | 6 木製灯籠跡実測図……………9 |
| 3 金堂柱跡呼称図……………5 | 7 補修軒平瓦拓本、実測図……………13 |
| 4 講堂跡本尊台座基礎東石瓦置図……………6 | 8 土師器瓦拵文字拓本……………14 |

第1章 調査経過

1. 発掘調査に至るまで

上野庵寺は昭和26年に東塔跡周辺が史跡指定されていたが、昭和42年に寺域周辺で宅地開発工事が計画実施された。このため、和歌山県教育委員会では奈良国立文化財研究所の協力を得て、史跡指定地に隣接した地域の発掘調査を同年9月に実施した結果、中門基壇の南辺と別廬の基壇共底部、参道などが確認された。直ちに、これら遺構の検出された地点を買収し、伽藍中軸部への開発を喰い止めた。昭和44年には、金堂・西塔跡ほかの周辺部が追加指定された。また、東部からの開発に対処するため、昭和45年度事業として文化庁の補助金を得て、東塔跡の東部、南部を買収することができた。

しかしながら、上野庵寺には、県下でも屈指の労働なる蓮華文軒丸瓦が用いられていたため、こうした間にも考古マニアなどにより、金堂跡・西塔跡を中心に悪質な盗掘が相續ぎ、一時は西塔跡の五積基壇が露呈するまでに至ったこともあった。また、昭和50年代に入り、一部の地主から史跡の買上げの要求もあったため遺構の不明地点については発掘調査を実施したうえで買収していく方針により発掘調査を先行させることになったため、県下における重要遺跡確認調査事業として昭和58年度より3年計画で発掘調査を



挿図1 上野庵寺の位置と周辺の主要遺跡 5万分の1

- 1 上野庵寺
- 2 直川庵寺
- 3 塔中遺跡（国史推定地）
- 4 山口庵寺
- 5 吉田遺跡
- 6 大同寺墳墓
- 7 雄ノ山峠
- 8 古道推定（南河内道）
- 9 古道推定（熊野道）
- 10 六十谷遺跡
- 11 田道遺跡
- 12 西田井遺跡
- 13 北田井遺跡
- 14 宇田井遺跡
- 15 檜谷御開田土地と八王寺山古墳群

実施してきたものである。

2. 調査概要

発掘調査にあたっては、現在保存されている個處中樞部の測量を100分の1縮尺で実施したうえで調査計画を立てた。また、トレンチなど調査区の設定にあたっては、露呈していた東西両塔の礎石利孔を結ぶ線上の midpoint を原点とした座標を組み、調査地点の位置関係を明らかにするように努めた。昭和42年度調査の中門跡については基礎南縁の東西隅を再確認し、座標内に位置を求めた。遺構などは10分の1縮尺で図面化するとともに、出土遺物の取り上げに際しては、調査の便宜上3メートル方眼のメッシュを組み、その高隅の座標値をもって地区名を与えて取り上げた。

昭和58年度は準備期間のあと、昭和59年1月より金堂跡・東塔跡・西塔跡・講堂跡などの遺構をトレンチ調査で確認し、西塔跡については拡張し、礎石配置などの調査を実施し、同年3月末日をもって調査を終了した。翌59年度は、やはり冬期を利用し、昭和60年1月より3月末日まで講堂跡と廻廊跡の発掘調査を主眼におき、一部金堂正面階段部などその他遺構の補足調査を実施した。最終年度の昭和60年度調査は、前年度の発掘調査によってその一部が確認されていた講堂跡・須弥壇遺構の検出を同年5月～7月にかけて実施した。その後、出土遺物など調査資料の整理を行い報告書を刊行したものである。

第2章 調査成果

1. 位置と環境

(挿図1)

上野廃寺は、和歌山市の東郊、和歌山市上野536番地ほかに所在し、旧名草郡の東部に所在する。紀ノ川右岸にあって紀伊と和泉を界する和泉山脈の南麓、標高約40メートル地点を占め、南面して建立されている遺跡の南側は吾舌の台地状地形が南方へ伸び、門前としてふさわしい地形である。さらに南には紀ノ川、あるいは紀ノ川の氾濫による肥沃な低湿地が広がり、紀ノ川下流域のいわば穀倉地域である。現在もN-10°-E方向の条里遺構が広く看取できる。

弥生時代から古墳時代にかけては、条里遺構がみうけられる地域の微高地に、田屋・西田井・北田井・宇田森遺跡などの集落遺跡が点在し、耕地開発の早かったことを示している。これら集落跡は、古墳時代に継続するものが多いが、古墳の築造は紀ノ川南岸の岩橋千塚に代表されるほど密ではないものの、和泉山脈山麓部などに古墳群が確認されている。5世紀代には紀ノ川筋が大和への重要な交通路として発達したことは紀ノ川流域の古墳文化が示している。古墳時代の終焉と共に大和湾、あるいは紀伊水道方面から大和に至る官道としての性格をもち始めるのは当然の帰結であったものとみられる。7世紀後半になると、これに面して多くの白鳳寺院が建立され、上野廃寺の他、東約1.5kmに山口廃寺(和歌山市山口)や、那賀郡内では西田分廃寺、北山廃寺、最上廃寺、伊都郡内では佐野廃寺、名古屋廃寺、神野々廃寺などが造営されていく。8世紀の初め、大宝二年(702)には「始置紀伊国賀院釈家」(現和歌山市加太) (続日本記)とあるように南海道の整備の状況がうかがわれる。

また、紀ノ川筋のみならず、上野廃寺より東方約3kmの雄ノ山峠越は和泉国との重要な交通であり、紀伊国風土記逸文に「タヅクニ(手東弓)トハ、紀伊国ニ有、風土記ニ見タリ、弓ノトツカ(手東)ヲ大ニスル也、其ハ紀伊国ノ雄山ノセキ(関)守ノ持弓也ト云ヘル」とあり、政治上でも重要な交通路であったことはいうまでもない。雄ノ山峠を下った地点に位置する那賀郡岩出町吉田所在の吉田遺跡で確認された奈良時代の諸遺構は、「駅家」的な性格が考えられることなどからも、上野廃寺周辺は交通の要衝としても大き

なウエイトを占めている。また、紀伊国分寺は上野原寺の東方約8kmの那賀郡打田町に造営され、西方約2kmの和歌山市府中を中心とした地域に園府が設置されたものとみられ、その規模や内容など不明の点が多いが、藤原為房の「大御記」によれば、永保元年(1081)雄ノ山峠を越え園府街道を経て日度、国分社へ参拝したとあり、奈良時代はともかく平安時代後期の11世紀では府中周辺に園府が置かれていたことは確実で、鎌倉時代における紀伊国の中枢部であったことがうかがわれる。

2. 地形と伽藍配置

(挿図2)

自然地形 標高約40メートル前後で和泉山脈の南麓端断層崖が終り、その南側には複合扇状地、あるいは和泉山脈から南流する谷川によって侵食された複合扇状地が発達し、低く南北に長い丘陵状地形を呈している。

上野原寺は、和泉山脈南麓端の断層崖直下に造営され、その主要伽藍を断層崖直下の標高39~40メートルを計る扇状地地形の頂部に造営されたため、地形の制約を大きく受けることになった。

造成 金堂の背後は高さ数メートルの崖状地形となっており、そのため、講堂は金堂の西方に配置する結果となっている。伽藍を造営するにあたっては大規模な造成事業が行われたであろうが、その一端を示すものとして講堂と講堂から金堂の背後を通る廻廊を設定するための丘陵を削り込んでいる状況が顕著である(PLAN1, P.L.1)。造成事業は主要伽藍区域全体に行われたとみられ、北半は地山を削り南部へ築土(講堂南部では1.7mを築土)している。その結果、伽藍中樞部は南側からみると高さ約3メートルの段状を呈する結果となったものとみられる。逆にみれば、その南正面に石垣をもった中門とその左右に廻廊がとりつく感容を示すための造成であったともいえる。

伽藍配置 段状に造成された伽藍中樞部には、県下古代寺院で唯一の双塔伽藍が建立された(P.L.AN1)。東西両塔の心礎間(40.65m)を基中点と原点として座標を設定し発掘調査に着手したものであるが、原点とした地点に木製の釘跡が検出された。伽藍の配列は灯籠が設置された点を基点とし20m強に東西両塔の心礎を、北20m強に金堂の中心を置き、南20m強に中門の基壇南縁(造成の南端)を、西塔心礎より20m強に講堂の中心を配置している。南門跡は水田などで早くから開発をうけたためか、昭和42年前後の宅地開発に際した調査でも明確に出来ずに終わった。地形の制約から講堂が金堂の西方に位置せざるを得ない状況は先にのべたとおりであるが、金堂と中門(基壇南縁)の中軸線はややずれている。以上から20m強(20.325m)を伽藍配置上の基準単位としているようであるが、中門の全容、廻廊の東辺などが明確でない現状では使用尺の問題も絡み今後の課題である。

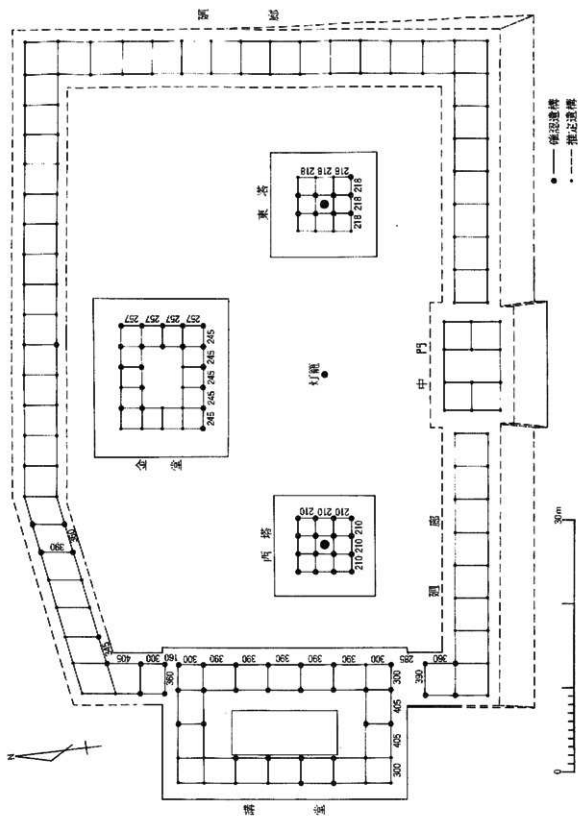
3. 遺構

(1) 金堂

(PLAN2, P.L.2.3)

基壇を中心に設定した十字形のトレンチおよび、正面階段部の発掘調査ならびに、落葉などの腐蝕層をかぶって遺存していた礎石から、桁行五間・梁間四間、基壇は東西約19m・南北約16.1m・高さ約1.5mの規模が判明した。基壇は地山を削り出した上に数10cmの版築を施したもので(P.L.3-3)で基壇縁の東辺の一部に河原石と瓦片を混用する化粧を検出したが他の三面では抜き去られたものか全く遺存しない。南面である正面の中央部には幅約2.85m、高さ約1.0mの乱石積の階段が遺存したが、崩壊が著しく、段の数・高さなど明らかでない。基壇上の礎石で原位置を保つもの6基、動かされているもの7基はいずれも紀ノ川南岸に産する蛇紋岩を用い、直径0.7~0.8m・高さ約6cmの柱礎を削り出している。

柱間隔は原位置を保つとみられる4ろ柱と4ほ柱の芯々距離は約7.35mで、各桁間は平均約245cmとみ



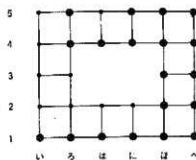
神圖 2 1. 野原子陶器復原圖

られ、4ろ柱と5ろ柱間は約258cm、4に柱と5に柱間は約257cmを計る。これら計数値と礎石抜き取り穴の位置から、金堂は桁間は245cm等間5間・梁間は257cm等間4間の建物とみられる。

基壇外には軒先から落下したような状況での瓦(瓦落ちと呼ぶ)の出土が顕著であったが、その下部には雨落溝は設けられていない。また、火災の痕跡は顕著でない。

主な出土遺物には瓦落から剝落片(PL.20-1)、隅木蓋瓦の蓋板片(PL.17-2)が、金堂築造後の整理とみられる瓦上を含む瓦層から縁輪広口甃(PL.21-75)が出土した。

なお、南北トレンチでは、基壇の北側で金堂背面を繞る廻廊の礎石と雨落溝が確認された。



押図3 金堂柱跡呼称図

(2) 東塔

(PL.AN3, P.L.4)

塔身の損傷が著しく心礎・廻柱礎石が二基遺存する。南北方向に幅3mのトレンチを設定した結果、西塔よりやや大きい218cm等間の塔とみられる。砂石の河原石を用いた心礎は西塔の心礎と同じく直径約90cmの枿穴を穿ち、中心には、やはり西塔心礎と同規模の上端の直径20-20.5cm・深さ21cm、楕円形の断面を示す舍利孔を穿つ。

高さ約1.4mを計る基壇は数少ない埴輪基壇で、埴輪化甃がトレンチで確認された基壇南辺の階段の両側に遺存した。化甃に用いられた埴は三種類の大きさが確認され、焼成後に甃1の痕がみられるものがある(PL.19-20-22)。心礎舍利孔から埴積外面まで約6.3mを計るところから、基壇の平面規模は約12.6mと推定される。なお、基壇南面には石積みの幅約2.2mを計る階段が検出されたがその遺存状況は良好ではない。

(3) 西塔

(PL.AN4, P.L.5)

礎石がもっとも良好に遺存するとみられた西塔跡は基壇上面の調査と基壇東辺の確認を主眼に調査区を設定した結果、西南四天柱の礎石が欠失するだけで他の礎石類は極めて良い保存状況を示した。

東南と東北の四天柱礎石は緑泥片岩を用いているが心礎を含む他の礎石はいずれも砂岩割石を用いており、礎石の配列は個体計画よりやや東へ振る傾向にある。礎石上面には、いわゆる柱あたりがかわろうじて観察ことができ、それらから西塔柱間は約210cm等間とすることができる。

上重約1.4m四方・高さ1.2mを計る心礎は東塔心礎と同様、直径約90cmの枿穴を穿ち、その中心には、蓋はめの段(上縁径22.5cm・下縁径18.5-19cm)をもった、深さ20.5cmを計る舍利孔を穿つ。心礎南東部には枿穴の湿気抜き溝が刻まれている。

側柱間には地覆基礎として長さ約50cm・幅約30cm前後の結晶片岩板石を礎石レベルに高さをそろえ横方向に並べている。

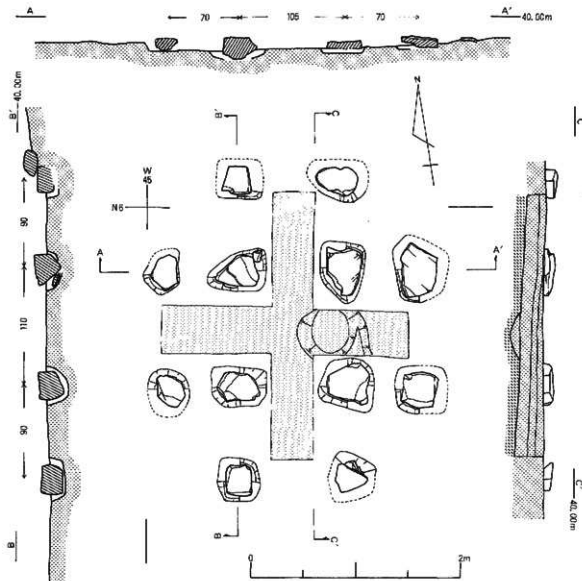
基壇は高さ約1.2mを計り、その平面規模は基壇東面の化甃面から心礎中心まで約6.05mを計るところから一辺約12.1mと推定できる。基壇東面に遺存した基壇化甃は半載平瓦を積み上げたものでいわゆる瓦積基壇で東塔の埴積基壇とは相違する。なお、瓦積み下部には人頭大の河原礫を基礎として配している。

同じく基壇東面には石積みの階段が設けられていたようで北側の耳石の一部がかわろうじて遺存した。耳石と基壇化甃の施されていない部分との関係から階段幅は約2.3mと復元することが出来る。東塔の南階段・西塔の東階段の確認によって、東西両塔の基壇にはその四面に階段が設けられたものと推定することが可能である。

西塔の西方に位置し、桁行七間、梁行四間の東西する建物で、南北の裏部に鐘廊がとりつく。

南北約29.5m、東西約18.1m、南壁での高さ約0.7mを計る基壇は、その北部では地山を削り込み、南部は造成築土の上部におかれ地山剛上を盛土するが、顕著な版縁はみられない。しかし、基壇上部は5cm前後の黄白色粘質土で「タキ」としている。基壇周りは正面になる東面は河原石を用いた乱石積とし雨落溝へつづく。南面も同様に乱石積とするが、石組みの雨落溝はみられない。基壇の西面と北面には石積みはみられない。礎石は蛇紋岩・砂岩の割石を混用し、中央が凹む礎石には湿気抜き溝を入れるものがある。東南隅と東北隅の礎石の芯々距離、つまり桁行の実長は約25.5mを計り、梁行は約14.1mを計る。このほか各礎石間の計測から講堂は、梁行2間(約8.1m)、桁行5間(約19.5m)の身舎に庇が四間に各一間(約3.0m)つき、屋根構造は東部の瓦落に増羽瓦(PL.15-a II)が顕著であることや、隔木蓋瓦(5)の出土と、桁間が中央五間で約390cm、両端が約300cmを計るところから、5間2間の母屋に四方に庇をもった入母屋構造であったことがわかる。

須弥座が身舎背面の中央3間分約12.95m、奥行5.65mの範囲に検出され、その中央部には本尊の台座



挿図4 講堂跡本尊台座基礎礎石配置図

基礎が遺存した。

須弥壇はまさしく瓦礫土で構成され、幅12.65m、奥行5.4mを計り、高さ約35cmが遺存する。下部は黄白色土、上部は黄褐色土・褐色土がみられる。これら構成土は下部ほどよくしまっているが、瓦礫の混入具合には差異はない。學大から人頭大よりやや小さい河原石に混じる瓦片は創建期の瓦類のみで、後世の瓦は含まれていない。

瓦礫土を盛り上げた土壇の外周は瓦片を敷き並べ、その内側に止め状に瓦片を立て並べている。その範囲は幅(南北)12.95m、奥行(東西)5.65mを計測する。これらは須弥壇の化粧としては不十分なもので、木材の使用を考えるべきかも知れない。この場合、並べられた瓦類は講堂土間あるいは須弥壇構成土が外装材に直接触れることのないように施した間隙材であろう。

本尊の台座は須弥壇の背面に接し、その中央部に設けられている。まず、上部の台座を受ける東の基礎となる礎石を井桁状に配置した後、その外周を六角形に人頭大前後の河原石を積み上げている。その高さは、現在35cm弱を計る。この六角形の石積みは外方に面を合せているようで、内部側は東の東の根を巻くように配置するなどルーズな状態である。この石組みのうち六角形の正面2コーナーには人型石を立てて用いており、構造的な要素として意図的なものかも知れない。

この石組みの設置は、基壇上面から東石設置のための掘り方をいり、これにより掘出された土を測定の石組みのクッション材として用い、その上部に石を組み上げたようである。

なお、石組みの内部は当然、空間となっていたもので、暗褐色あるいは黒褐色のシマリのない土がたまってた。また、この土の中には多量の釘(長さ約5cmのものが35本以上、約8cmのものが9本以上ほか)がみられ台座に用いられたものと考えられよう。

須弥壇の背後の中央一間の礎石間には平瓦と礎を混じえた地置遺構を検出した。このことから本尊の背後にあたる中央一間には佛後彫が置かれ、礎面が描かれていたものであろう。西方に向い礼拝する講堂の本尊は阿弥陀仏とみられ、佛後彫には阿弥陀来迎図が描かれていたことが考えられる。

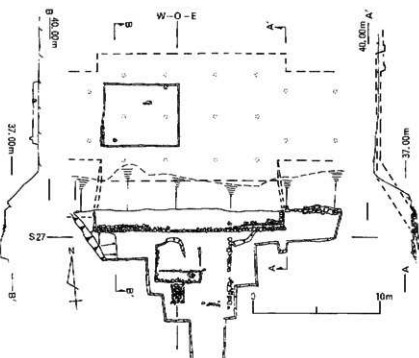
(5) 中門

(PLAN 7, P.111)

乱石積み基礎の南辺部(15m)を検出した。東辺部・西辺部ともに約1.4m分を検出したにすぎない。基

壇外装は、直径約30cmの川原石を用いた乱石積みで、南辺ではその最下段を残すのみであったが、東西両辺では2~3段残る。基壇南辺部の石列は2列あるので、一見、二重基壇のように見受けられる。しかし、基壇の大半部が調査区外にあるので明確なことは言い難い。

基壇南辺のはほぼ中央部南側に、石組みの盛り出し(東西5.9m、南北5.7m)を検出した。奥行、



挿図5 中門跡発掘地点と中門推定図

すなわち南北長が少々長い、これは門に付属する階段と考えられる。この階段は後に改修されて小規模(東西3.4m、南北3.9m)なものとなり、約1m西に寄せられる。このため、階段は門の中心からふれることとなる。縮小された階段は下から第一段(高さ約30cm、奥行約80cm)と第2段が残っている。遺存しない各段の奥行もこれと同じ規模であれば、5級6段の階段に復元でき、第1段の高さ30cmを各段に等しい高さとする、門基壇の高さは1.8mに復元できる。

本遺構を中門跡とする理由として、まず東西両塔の心礎中心を結んだ線と、門基壇南端までの距離は約27mで、検出した門基壇の東西長、すなわち桁行方向の長さは15mあり、この規模で桁行3間、梁間2間の門を考えた場合、柱間寸法約3m(10尺)等間とすると、門の規模は桁行9m、梁間6mとなる。そして、軒の出を約3mずつとれば、桁行方向15mに対して、梁間方向12mの葺道が復元できる。このように考えると、東西両塔基壇の南辺を結んだ線と門基壇北辺との距離はおよそ7~8mになり、この中にもう1棟の門をおくことは困難である。また、門の階段から南へ伸びる参道は、通常、古代寺院では南門から南へ参道が設けられる例がないことから、中門と南門をつなぐ参道と考えられた。以上のことから、検出した門の基壇東辺部にとりつく形で検出した基壇は、廻廊基壇と考えられる。

注 昭和58年度以降の発掘調査によって中門基壇の南面は石状に組み上げられ、その高さ約3mと復元されるに至った。また、基壇上に東西6m、南北5mの調査堀を設定したが、基壇西面の一部が崩れた状態で検出されたにとどまった。

(6) 廻廊

(PLAN 8, P.L.12, 13)

中門東 基壇東南隅から約1.4m北で、東にのびる乱石基壇を検出した。この基壇に用いられた石は門基壇の石より大きく、長さ60cmをこえるものもみられた。石積みは、部分的に3段から4段残るところもある。門基壇西側では、すでに後世の掘削を受けていたためか、石積みを検出することができなかった。

講堂南 講堂基壇南面には約0.4m低い廻廊基壇(幅約6.3m、高さ0.3m)が取り付く。講堂基壇縁には人頭大の河原石を置き区切りをつけている。廻廊基壇にもその化粧として河原石が用いられたとみられ、東西面に一部が遺存している。

講堂南端の柱列から約3.9mに北端の柱をもったこの廻廊は一柱間南へいったところで東へ折れ中門方向へ延びるもので、東へ延びる基壇は後世の掘削が著しいが、雨落溝の北側、つまり西塔前庭から廻廊の雨落溝となる廓部にはおもに平瓦を用いて化粧している。この雨落溝は西方に延び廻廊基壇を断ち切って基壇西辺に沿って南へ落ちるものとみられる。廻廊基壇を断ち切る溝は人頭大の扁平な河原石で土止めし、底には、河原石と平瓦片を敷いている。礎石は一基が遺存しただけであるが、礎石抜き取り穴や講堂北側の廻廊の状況から、廻廊東面の柱は講堂東部の柱列にほぼ合致し、南へ一間のびる桁間は約3.6m・東西の梁間は約3.9mを計る。

講堂北 講堂基壇より約5cm低い廻廊が取り付き、講堂基壇を区切る際立った施設はみられない。講堂の北面につながる浅い廻廊西雨落溝と東面の雨落溝から廻廊基壇の幅は約5.7mを計測する。東側雨落溝北辺は講堂東雨落溝に連なる葉掃りの排水溝を埋め、新たに雨落溝と廻廊基壇を断ち切った排水溝を設けている。講堂北側は和泉山脈の山麓が迫っているため、地山を削り込んで廻廊を設けている。

廻廊の南端は講堂基壇北縁に、つまり講堂北柱列から約1.7m北側に置かれ、東面の柱列は講堂のそれにはほぼ合い梁間は約3.6mを計る。そして北へ2間(東柱列約7.2m・西柱列で約6.1m)で金堂背後方向へ約107度の角度で折れる。これも、伽藍中軸部へ迫っている自然地形の制約によるものであろう。廻廊の東南へ南面には幅約1.4m、深さ約0.1mの浅い雨落溝がみられる。

金堂北西 講堂北部で折れ金堂背後へ延びる廻廊の一部を検出した。伽藍計向線に約107度の角度をも

ら、桁間隔は約3.6 mとみられる。梁は桁に対し直角にならず、約3.9 mの幅で伽藍計画の南北方向に置くため、この部分の廻廊の桁と梁は平行四辺形を呈することになる。北柱列の礎石間には地覆の下部にあたる部分に20cm角前後の割石が散乱している。

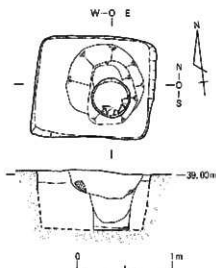
金堂北 金堂に設定した南北トレンチの北部で緑泥片岩を用いた礎石と、黒色土器柄などを含む灰色砂質土が堆積する東西方向の南側溝落溝を検出した。溝落溝下底と廻廊基礎上面の比高は約15cmを計る。木礎石の検出によって、金堂背後の廻廊の桁間隔は約3.6 m間隔とみられる。また、基礎を南北に断ち切った小溝を検出した。これは講堂北部にもみられた背後の山壁部からの雨水などの処理を目的とするものが、いまひとつ明らかでない。

(7) その他の遺構

(P.L.14)

A 灯籠跡

金堂正面で、かつ東西両塔の midpoint (発掘調査の地区型で盛標原点とした地点) で大型の椀立柱状の遺構を検出した。築り方の上辺は約1.25×1.1 m・深さ0.6 mで、柱状遺構の底縁の直径は37 cmを計測し、抜き取り痕には埴や瓦片を投棄していた。単独遺構である点や、椀立柱建物としては柱状の痕跡が大きく、また、建物を築てる場所でない地点であること、そして、各地の寺院跡において金堂正面に灯籠が確認されていることなどから、本遺構を灯籠跡と考えるものである。同様の遺構として県内では、伊都郡かつらぎ町に所在する佐野庵寺跡で、より大規模な遺構が検出されている。



挿図6 木製灯籠跡実測図

なお、基礎となる土石などがなく、椀立構造であることから、木製の灯籠であるとみられよう。また、本遺構に近接して灯明皿として用いられた土師器皿(P.L.21-17)が出土していることも付記せねばならない。

B 参道

中門にとりつく階段のうち、縮小された階段の南辺中央部からは参道(幅約1 m)がのびている。南方へ約1.7 mまで検出できたが、それより南は後世の擾乱を受けているために検出できなかった。参道の東西両縁には、長径約15~25cmの川原石を埋めこんで石とし、路面には小礫(直径5~10cm)を敷いている。また、踏石(幅30cm、長さ40cm)として川原石を2個、横並びで階段に寄せて置いている。

4. 遺物

(1) 瓦 埴

A 創建期瓦埴

軒丸瓦

(P.L.15, 16, 遺物実測区1)

A類 軒丸瓦総数248点のうち240点(約97%)を占める四弁の子葉をもつ複弁八葉蓮華文軒丸瓦Aは、斜行三角縁に三条の沈線を施した面違い銅文をもち、中房は圏縁であらわした座をもつ珠文が1・5・8と配されている。珠文の多くは半球形を示しているが、円錐状を呈するものもあり、本来は円錐形の珠文を范に彫り込んでいたことが知れる。製作上の技法として、瓦当裏面への丸瓦の差し込みがどの資料にもよくみられる。

瓦当側面に二条1単位の凸線を2単位とした植文具で凸線を施すものA(1)、低い三条の凸線を施すもの

A(2)と凸線を描きないA(3)がある。これらの出土比率は全体を100とした場合約21:13:66であり、総じA(1)が范の出が良くA(2)・A(3)はあまり良くない。またA(2)は講堂に多用される傾向にあるがA(1)・A(3)は各家塔に偏在する。

焼成は青灰色を呈する須恵質以上に堅緻な焼成と、灰色、褐色を呈する軟質焼成があり、瓦当径は須恵質焼成の約18cmから最大は軟質焼成の20cmに近いものまでばらつきが目立つ。

丸瓦部はいずれも行基様の丸瓦部で、中に瓦尻を切り上げたものがみられる。瓦当部を含めた長さは平均約45cmを計る。

B類 通常の凸弁子葉をもつ複葉八葉蓮草文軒丸瓦である。金堂、講堂に各1点、中門で6点の総計8点の出土である。

直立縁状に終る外縁端に緊密に珠文をおき、さらにその内部に面違飾文を施す。突出した中房には低い内唇をもった珠文が1・5・6と配されている。このうち、中をまわる5個の珠文は他よりやや小さい。范型への粘土は中房と蓮華文を飾る内区に粘土甲板をまよおしあて、そのうち、外縁部の粘土をつめている。丸瓦部の接合はA類と同じである。

焼成は須恵質焼成のものと、やや軟質のものがあり、前者の瓦当径は約17.6cm、後者では18.8cmを計測する。

軒平瓦

(P.L.15, 16, 17, 遺物実測図1)

a類 軒丸瓦A類と組合せになる軒平瓦で、a Iは均正忍冬唐草文、a IIは偏行忍冬唐草文、a III・a IVは中心飾を欠くが均正忍冬唐草文を飾るものとみられる。

a I 二重門とその外側に花卉状の尖頭形を半浮彫にした中心飾をもち左右にのびる忍冬唐草文は主茎の第10結節が省略され中心飾下部の結節から直接に2葉葉が派生し、主葉は2回反転し、第2結節には蕾がおかれず2葉の支葉になる。主茎の先端部の最終結節からは支葉状のふくらみのない蕾がおかれる。

瓦当と平瓦部の接合は、厚み約3cmの瓦当部粘土の裏面に平瓦部を差し込むために気状の溝を入れ平瓦を差し込んでいる。この時、平瓦は先端部の上面、下面を削り尖らしている。また、接合強度をはかるため、刻目を入れたりしている。平瓦は斜格子と正格子叩きをもつ。

類は直線型で、瓦当下面に軒丸瓦A(1)と同様の二条1単位の凸線をもつものa I(1)と凸線をもたないものa I(2)がある。前者は斜格子叩きの平瓦をもつものとみられ42点、後者は正格子叩きの平瓦をもつもので49点が確認されている。

a II 総数5点でいずれも講堂跡より出土し、内4点は南廻廊部の瓦落ちに集中した。偏行忍冬唐草文を飾るもので左から右へ6単位をみ、各結節からは有茎の特徴ある蕾を配している。右下りの蜂羽瓦として用いられたとみられ、平常の軒平瓦の形に製作後、瓦当右端を上方へ折り曲げている。上面にはこの時の調整痕として瓦当に直交する方向のナデが顕著である。また、無理に折り曲げるため瓦当右端が脆弱で5点とも屋根材からの落下時には瓦当が剥落する結果となっている。

類は直線型で、頸部に二条の凹線を施すものがあるが、a I(1)のような凸線はもたない。瓦当にはa Iと同じ技法で正格子叩きをもつ平瓦を差し込んでいる。

a III 中門・講堂で各1点が確認されている。忍冬唐草文の先端部の表現はa Iと同様で均正唐草文を飾るものであるが、第2結節にはふくらみのない蕾が配されるためa Iと区別できる。直線頸部には凸線はない。中門出土の個体では反り著しい。

a IV 忍冬唐草文を飾るが偏行が均正かは明らかでない。均正唐草文とした場合、第一・二結節が確認され、それぞれふくらみのない蕾を配する。直線型で、頸部にはa I(1)同様の凸線をもつ。平瓦部の接合はa I・IIと同じである。2点出土。

以上A類の軒平瓦についてふれたが、a III・a IVは均正忍冬唐草文を飾る同一范の全体とみられ、a IIIに対応する左下りの蟬羽瓦ではないだろうか。

b類 軒丸瓦Bと組合せになる軒平瓦で、軒丸瓦同様に外縁部に珠文を緊密に配する特徴的な軒平瓦で、均正唐草文を飾る。中心飾のちがいでb I・b IIの二種がある。出土点数はa類102点に対し、b I 21点、b II 8点と少なく、いずれも完形品はない。殆どどの個体に、縦割り痕、ハツリ痕がみられ、隅切りの断片(b I)も確認されることから、遺具瓦、あるいはそれに類する瓦とみられる。

b I 雲状文を中央に、その左右に円形文とそれを取りこむ半円形文をもった中心飾をおき、左右へ伸びる唐草文は主莖が退化し3反転するが、それぞれ独立した単位状になる。主莖の第1・第2結節に相当する主莖の基部に退化した結節のなごりがみられ、第1・第2主葉間の2本の支葉や、第2・第3主葉間の雲状の表現は忍冬唐草文の承譜をひくことは明らかである。

b II b Iの雲状文を三葉状文におきかえた中心飾をもつ均正唐草文を飾る。主莖のなごりはなく、左右3単位の主莖が反転する。b Iとの関連性において、忍冬唐草文の承譜をひくが、わずかに、第2・第3主葉間に雲状の表現がなされている程度であり、第1・第2主葉間の支葉は飛雲状になるなどその退化は著しい。

隅木蓋瓦

(P.L.17, 遺物実測図2)

箱形の隅木蓋瓦である。隅木を覆う蓋板(2)は主軸中央がわずかにふくらみみせ、その後端に芽負隅にはめるため、一辺約5cmの二等辺三角形の切り込みが入れられる。蓋板側面から約4cmで側板を接合している。蓋板主軸からは約10cmを計るところから隅木の幅は20cm弱であろう。

箱部の正面、側板は表検を含め5点の資料を得た。いずれも、篋などを用いて浮き彫りにしたものである。中門跡出土の正面部断片(1)は高さ約21.5cm、幅23.0cm、厚さ2.5cmを計る。下向きにおいた有茎・有節の扇形パルメットを略形で開き主文とし、その下縁に釘穴をもつ。また、周囲には左右対称の火焰文とみられる渦文を施す。側板片と判断できる(3・4)も正面と同様の文様をもつもので、その後縁は雲形曲線に削り込み(4)渦文を彫彫している。なお、正面と同様の位置に釘穴を有する(3)。

焼成は灰褐色を呈する軟質のもの、青灰色を呈する須恵質の硬質(5)のものとがある。

鱗尾

(P.L.17, 遺物実測図2)

金堂・講堂・中門跡より10断片の出土をみた。胴部から頭部にかけての新片(6)は下部に半円形遺した穴の一部をみせる胴部上面へつづく断片で側面から上面へは強い稜線をもって界する。厚さ8cm強を計る大型品である。同じく半円形遺した穴の一部をみせる断片(7)はその内面に根い青海波叩きが残る。(8)は二条の縦帯をもつ断片でその右側に段型をもつ。(9)は鱗部の断片で幅約4.5cmの段型が観察でき、段の高さは0.7cmを計る。同じく鱗部断片(10)は幅約5cm、高さ0.6cmの段が観察できるが、その削りはきわめて粗雑で胴部と鱗部の境界も明らかでない。成形時の粘土塊の高さ約9cm単位の割がれ片である。このほか、腹部下端、半円形削り形部の断片とみられるもの1点、鱗部片2点がある。

丸瓦

(P.L.18, 遺物実測図3)

一点の玉縁をもつ丸瓦片を除いて、すべて行基葺の丸瓦である。前者は須恵製の焼成を呈し、丸瓦凸部は縄目叩きをすり揃している。

行基葺丸瓦は須恵質、あるいはそれに近い焼成のものが多い比較的薄手の丸瓦のA群(1)と、やや焼成のあまい褐色調を呈する厚くて大振りのB群(2)がある。

A群は長さ約38cmから約46cmまでバラつきがあるが前端部の幅約20cm、高さ約10cmを計るものが多く後端部、瓦尻はややバラつきがあり、長寸のものは幅約12cm、高さ約6cmを計るものが多い。つまり、下部の直径約20cm、上部の直径約12cm(焼成時の寸法)の粘土円筒を覆うことができる。これら半截後、内

部に限り前どりを行っている。そして寸法の短い丸瓦は、上部、つまり細い部分を切り捨てたものとみられる。

凸部には、壘形時の回転ナデにより壘形を行っているが、縄目叩きをのぞく正格子・斜格子など数種類の叩き目が残るものがある。内面の圧縮は1cm四方10×9本程度の経糸・緯糸が観察でき比較的細かな布を用いている。

B群は、長さ約39cmを計る(1R)以外は全長を知る資料を欠くがA群と同様、その長さは数種類あったものと推定される。前端部の幅は約21cm前後、高さ約11cm前後を計る。B群には粘土円筒を半截するための分割線がみられる。内面の布はややあらく、経糸・緯糸は1cm四方7×8本を数える。

平瓦

(P.L.18, 遺物実測図3)

2群の丸瓦がみられたように平瓦も大きくは二群に分けることが可能である。広端・狭端部の差が小さいA群(13・14・15)と広端と狭端部の差が大きくA群に比して相対的に凹部が浅い観をうけるB群(16・17・18)などがある。

A群は灰褐色を呈する須恵質焼成のものや、赤褐色を呈するもの、焼成は堅緻なものが多く、B群より相対的に焼成が良好である。広端部と狭端部の差がほとんどなく、B群平瓦製作時の柄巻が幾何円錐形でそれぞれ1枚の形が台形を呈するのに対して、これらA群の物は円筒状のものであったことが判かり、1枚の平面形はほぼ長方形を呈する。凸面叩き目の磨り消しは顕著でなく、多くが叩き目をよく残し、縄目叩きをのぞく、斜格子など数種類の叩き目が残り、凹凸のとくに激しい部分のみ削りとなっている。瓦の内側の仕上げは、次の述べるB群平瓦が窯の中心方向への分割のままのようであるが、これらA群平瓦は分割後、再度壘形により軒平瓦の備面と同様逆さ上げ時に垂直面のカットとしている。また、軒平瓦の平瓦部としたものがA群平瓦の一部とみられ、軒平瓦との関連性の強い平瓦群である。このほか焼成などの状況から丸瓦A群と組合せられることが考えられる。

B群は、全長48.5cmを計る最も大きい凹部から長さ約40cmを計るものまで大きさはやや不揃いであるが、正格子・斜格子の平瓦目を丁寧に磨り削している。(5)のみ例外で斜格子の叩きを基調とし、一部正格子の叩き目が重複している。広端部の幅34.5～38.5cm、深さ約6.0～8.0cm、狭端部の幅27.5～30.5cm、深さ約5.0～5.5cmを計る。舞上げ時、約17.5cmのかぶり強が観察できる。これらは、比較的軟質焼成で、先に述べるA群に比べ相対的に厚いことなど、丸瓦B群との組合せが考えられる。

このほか、六角形の凸部を彫り出した叩き具による凹部などがある。布目の粗さはA・B群・その他ともに大きな差はなく、経糸・緯糸は1cm四方平均9×10本程度である。

鬘斗瓦

桶巻平瓦を数断した鬘斗瓦1点がある。細かい斜格子の叩き目が残る平瓦を利用したもので幅約9.5cm、厚さ3.0cmを計測するが長さは不明である。

埴

(P.L.19)

埴積基壇をもった東塔礎からの出土が顕著で、良好な資料を得ることができた(P.L.19)その他の堂塔からも断片の出土をみた。大小三種類の大きさの埴を確認した。2は縦横36.0×25.3cm、厚さ11.4cmを計る最大規模の埴で、側面の削り整形痕が顕著にみられる。3は33.7×25.3cm、厚さ11.4cmを計る。片面の周縁を打ち欠く細工をみせる。もう一種は26.7×21.3cm、厚さ12.2cmを計る小型品で片面に、12.0×17.0cmの方形の浅い彫り込みをもつ。成形時の粘土塊のなじみが悪く、縦割りに割かれている。

B 廻廊の瓦

(P.L.18, 遺物実測図2)

講堂の南北表部にとりつく廻廊は、講堂東西の雨落溝と一連の講堂北部の素掘り排水溝を埋めて建設されているため講堂の完成よりやや時期の下る建立であることは先にふれたとおりで、素掘り排水溝の出土

に含まれていた灰器・土師器(遺物実測図5-30・31・43・52・70)が用いられた後の建立である。ここで説明を加える小型の丸瓦・平瓦は、講堂南の瓦落ちからも多く出土するが、その葺き上げた状態のまま、講堂北の遺構が倒壊した状況で一括出土をみた。ともに軟質焼成と須恵質を呈する埴質焼成があるが、胎土は砂っぽいしまりのない粘土を用いており、同一時期、同一工場の製作であろう。

丸瓦

長さ約30cm、前縁幅約17cm、高さ約8cm、瓦尻部で幅約10cm、高さ約5cmを計る行基葺丸瓦である。②5比較的に薄いつくりであるが、前縁部は厚みさせる、凸部にはナデ整形が不十分で、きわめて粗い縄目叩き痕が顕著に残る。截頭円錐形の模印に巻かれた布には粗密2種の布が用いられている。経糸・緯糸が1cm四方あたり9×8本の布と5×7本の粗い布である。

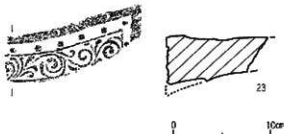
平瓦

長さ33.8~35.0cmを計り、広縁部の幅25.2cm、深さ3.0cm、狭縁部の幅約22.5cm、深さ3.6cmを計る一枚造りの平瓦である。用いられた布は丸瓦に用いられた布と同種の布を用い、凸面には丸瓦の縄目叩き痕と同様な粗い縄目叩き痕がみられる。どの個体にも、瓦の中心線を軸にして左右対称に縄目叩きを施している。つまり、瓦の両側面から叩いたため中心線で筆先状に叩きめが重複するめずらしい叩き痕を成す。

C 補修瓦 (P.L.19)

軒平瓦

金堂跡より1点強が出土した。ほぼ中心で破損した資料であるため明確にはし難いが、内区は花頭形の中心飾をもち左右に3反転する蔓草文を飾るもので、主葉や支葉の巻きが著しい。界線をもって区切られた上外区縁区には、円珠文を配す。下外区は欠失しているが同様に円珠文で飾られるものであろう。



拍図7 補修軒平瓦拓本、実測図

外縁は幅約1.1cmで、その外側には范の深さを示す0.4cmの段が顕著に残る。頸は外区部とともに剥落しているが曲線頸とみられ、平瓦部には細かい縄目叩き痕が残る。平安時代初期のものともみられる。

平瓦

①は長さ39.5cm、広縁部幅は約30cm、深さ約5cmとみられ、狭縁部幅は約26.5cm、深さ約4.5cmとみられる。②は長さ37.3cm、広縁部幅27.5cm、深さ4.7cm、狭縁部は24.0cm、深さ4.0cmを計測する。いずれも一枚造りの平瓦で、胎土精良で暗灰色を呈する。②6の焼成は良好で凹面布痕は1cm四方7×6本の経糸・緯糸が観察できる。②7は小豆粒大の砂粒を多く含む胎土をもち、灰泥色を呈するやや軟質焼成である。布は①よりやや粗い。凸面には、②5・②6ともに細かい縄目叩き痕がみられる。奈良時代末から平安時代にかけての平瓦であろう。このほか、ほぼ同時期とみられる粗い縄目叩き痕をもつものがある。

(2) 仏像

A 塑像

衣文が表現されている小断片である。(1)火中し焼けたただれている部分があるが、胎土は明るい褐色を呈するやや砂質気味の精煉された粘土を用いる。像右側の衣文が肉彫り状に表現され、衣文のひだの幅は、1.1~1.7cmであらわされている。金堂跡基壇縁の瓦器より出土した。

B 鏡先

小型の神将像が持つ青銅製の鏡先とみられ、講堂跡須弥壇に接して出土した(2)。鏡から枝部にかけての長さ4.7cmを計る断片で、刃部には枝刃とも溝を表わしている。鑄型のずれのため、本来は菱形を呈すべ

き断面は平行四辺形を呈し、縁には鋳造時のバリが顕著である。

(3) 飾り金具

(P.L.20・遺物実測図4)

A 三角形銅板

講堂跡須弥壇の本尊台座遺構およびその周辺より3点(4・5・6)が出土した。厚さ1mm強の青銅板を長さ3.5cm～約7.5cmの不定形な三角形に切ったものである。頭部を青銅製の釘で留めたもので(6)には釘が遺存し(4・5)には釘穴がみられる。

B 金銅板片

講堂跡須弥壇に接して出土したものの(6)で、厚さ0.5cm程度の青銅板に鍍金する。緩やかな波状を呈するが、これが当初の形状であるのか、埋没後の土圧による変形か判断しにくい。

(4) その他の金属遺物

(P.L.20・遺物実測図4)

A 青銅製品

講堂南側の瓦溜出土(7)で、厚み1cm前後の鋳造品で、平滑部と段形を鑄出すが旧状は明らかでない。全体に気泡が多く混入し舞上りが悪く、表面を平滑・均正化するため金鋸状の工具で叩いている。

B 開元通宝

講堂跡西北部、香道出土で、直径2.3cmを計る(8)。保存状況は悪く、文字の鋳出しも低い。

C 鉄製金具

講堂跡須弥壇の本尊台座遺構周辺に集中して(9)のほか7点が出土した。表面とみられる部分は長さ4cm、幅1.5cm前後の鉄板で、裏面の左右端に近い部分から直径約5mmの棒が付き、その端部には約1cm四方の不定形な鉄板が付く。須弥壇の木部をかした金具とみられる。このほか(10～15)の板状などの形状を示す鉄器があるが、旧形・用途はあきらかでない。(16)は断面円形を呈する鉄棒の一端を円弧状に曲げたものである。

D 釘類

各堂塔から多数の釘・鍍などが出土した。釘(17～28)は最大のもので約24cm、最小のもので約2.7cmを計る。断面形状はいずれまでもなく正方形を呈し、1辺1.2cm四方から0.3cm四方までのものである。(30～32)は有頭の釘で(30)はこれら有頭釘などの壓金具であろう。(33～36)は釘の頭部を折りまげたもので、(33)は、鈎状を呈する。(34)は小型の鍍。(35)は現在のボルト・ナットの役割を果たしたもので、ハネ木をとめる吊金具かもしれない。

(5) 土器類

(P.L.21・遺物実測図4・5)

A 土師器

蓋(1～3)は、小型の杯あるいは皿の蓋とみられる。口縁部端を屈折させる直径9.2～9.8cm前後の土器で、金堂跡より数点の出土をみた。

小皿(4～12)は小型の皿で多くは灯明皿として用いられたようで、口縁部内外に灯



挿図8 土師器類
拓文字拓本

志部の油漬が付着するものが多い。(13～15)は台付の小皿で供献の土器であろうか。

杯(16～18)は杯部の立ち上りに回転を利用した同心円状の凹凸が顕著である。平城宮跡の発掘調査資料でいう「手法を用いている。いずれも灯明皿として使用している。(19)は口縁部を玉縁状に肥厚する。底部内面に施す文字を残すもの(挿図8)がある。

皿(20・21)は大型の皿で、杯と同様に「手法を用いている。やはり灯明皿として使用する。(22)は台付。

境 (23~25・27)は高台部片で肩部を欠くが、次に示す黒色土器境(32~34)に類するものであろう。26は、やや小型の境で口縁部端を外反させたいえ口唇部をつまみ上げる。

盤 ⑧は白付盤の高台片とみられるが、端部を失っている。「法法がみられる。

壺 数点の壺が出土した。⑨は外面を粗く彫削りを施す。内面は「冴なナデを施す。

高環 ⑩は底と脚柱部の接合部断片2点が出土した。⑪の脚柱部は10面切り、⑫は平底部に凹部をつくり脚柱部を当て込んでいる。ともに印文は不明である。講堂北の素掘排水溝より出土。

B 黒色土器

境 内面黒色を呈する。いわゆる黒色土器Aは境身部の立ち上がりかきつい古式の様相を示す(32~34)と、「手法を用いた境身部の立ち上がりかゆるいもの」とがある。両面黒色のいわゆる黒色土器Bは小型の境部が一点認められた。

C 須恵器

環蓋 まさに蓋と身が入れ替ろうとする最終時期の蓋⑬、宝珠つまみをもち、小型で内面にかえりのもの(37・38)、やや扁平になり径が大きくなった(39・40・41)と、扁平な宝珠つまみをもち、内面にかえりのない(42~44)があり、④は蓋自身が高さをもたず、もっとも新しい時期のものである。

環 蓋受けが残る古式の⑭⑮、高台をもたない(52・53)、高台をもつ(46~51)のほか、薄手のつくりで口縁部端が外反する⑯がある。緑釉斑などに共通要素をもつもので境かもしれない。

浅鉢 ⑰の大型品の胎を呈する⑱と、あるいは環とすべきかとみられる⑳がある。㉑は暗青灰色を呈し、胎成はきわめて堅緻である。

盤 高台のつく(57・58)がある。57は56に似、焼成良好である。

壺 小型の壺ともいうべき壺として口縁部に波状文を施した㉒、柄を連続刺突した⑳があり、肩部に4ヶの嘴をもつ㉓、耳をもつ㉔のほか、いわゆる茶喉とされる広口壺の高台部⑳、高台のない㉕、水瓶とみられる㉖などがある。

壺 口縁部内径約45cmを計る大型の㉗がある。灰褐色を呈し焼成はややあまい。

平瓶 口縁部から把手部にかけての断片㉘で体部の直径約21cm、高さ約12.8cmに復元できる。

鉢 いわゆる鉢林に(70~73)がある。㉙は尖底で㉚は尖底部を鋭削りし丸みをもたす。㉛は口縁部を玉縁状に肥厚させ、体部は噴飯吹きによる顕著な凹凸をみせる。

D 緑釉

広口壺 いわゆる蒼色の釉薬がみられる㉜は白灰色ないし灰黒色を呈する精選された水越しの胎土をもつ軟陶の壺である。体部層の直径約13.5cmを計り、高さは約21cm前後に復元することができる。

境 黄緑色の釉薬をみせる㉝は、砂質気味の胎土で焼成は硬質である。境身部はほぼ直線状にひらくもので、次に示す越州窯磁胎の影響をうけたものであろう。㉞は暗灰緑色の釉薬をみせ、胎土は緻密で須恵質焼成の身部が内湾する通有の形状を呈する。

E 灰釉

壺 (78・79)の二片が出土したが、いずれも小片で、器形を復元することはできない。灰緑色の釉薬をみせる㉟は肩部、暗灰緑色の釉薬をみせる㊱は体部下半の断片である。

F 越州窯青磁

碗 ㊲は薄い灰緑色の釉薬をもつ、やや内弯気味の碗身の断片で、蛇ノ目高台とみられる底部は欠失する。

G その他

短頸壺 ㊳は灰緑色を呈する厚い釉薬をもち、胎土は砂質気味であるが、焼成は極めて堅緻である。

第3章 総 括

前章までに、遺構・遺物などについて報告してきたが、これらを通じて上野廃寺の創建から隆統までの経緯を整理し、総括にかえたい。

まず、創建の時期についてふれなければならない。東西両塔をそなえた薬師寺式の伽藍配置は、いわゆる白鳳寺院として紀伊国ほかでも多く採用されてきた法起寺式伽藍配置などに次ぐものとみられ、天武八年(680)の薬師寺建立発願と関連深いことはいうまでもない。出土瓦葺の面からは、天智九年(670)の焼亡後再建された法隆寺西院伽藍にみられる意匠や、これに用いられた瓦葺の検討から上野廃寺の創建を法隆寺西院金堂の建立とはほぼ同時期とする見解、あるいは、西院創建期よりやや遅れた7世紀末葉とする見解がある。法隆寺西院金堂の再建時期が判然としない現状では明確にはできないものの実年代のうえでは両見解が大きくかけ離れているとは思われない。

ここで、今次の発掘調査で得ることができた須恵器からも検討を加えてみよう。創建期の土器と考えられるものうち、杯蓋36・37・38、J45は7世紀中頃前後に比定できる一帯で点数もわずかである。次にくるものとして、口縁内側に返しをもち37・38よりも皿平で径が大きくなる杯蓋39-41、あるいは42、杯46・52・53が占める比率が高まる。前者は創建以前の土器が用いられたものとみられ、後者がまさに上野廃寺の創建期にあたる須恵器とみることができ、創建期のこれらは法隆寺・藤原宮あるいは川原寺瓦葺の葺板瓦葺などの調査成果からみて7世紀の第4四半期に比定できる。

以上から、現段階では上野廃寺の創建は、瓦葺部から考えられてきた時期を含む7世紀の第4四半期に求めやや幅をもたせておきたい。

次に創建期の葺瓦の系譜と分布についてふれておきたい。軒瓦Aは川原寺の系譜をひくものであるが、榎介蓮蔵文の子葉が四弁ふうに表示されている。こうした子葉のあらわし方は薬師寺や法隆寺西院伽藍の軒瓦Aにみられる。法隆寺西院伽藍の軒瓦と組合せになる軒平瓦が上野廃寺の軒平瓦A Iと同種の均正忍冬唐草文軒平瓦である。すなわち、上野廃寺の軒瓦Aは軒平瓦A Iと同様に法隆寺西院瓦の影響を強くうけていることは隅木蓋瓦が西院伽藍の意匠を引き継いでいることもあわせ周知のことである。軒瓦B・軒平瓦B類はいずれも狭い外縁部に緊密に珠文を絞らしている。先にも示したように軒瓦Aに比べきわめて少なく、軒平瓦では隅瓦が確認されているほかその殆んどが復創りにされ用いられており、軒瓦Bは軒瓦Aと混じえて道具瓦として使用されたものである。外縁に絞られた珠文から新羅的要素が指摘されており、軒平瓦は統一新羅時代の双塔寺瓦として知られている慶州千軍車廃寺などに属例がある。朝鮮半島南部との交流を強く示す資料で、遺構のうえでは双塔形式そのものの導入にも示されるように上野廃寺の建立にあたって新羅文化の影響があったことを示している。

子葉を四弁ふうにあらわす軒瓦Aの属例は、山口廃寺、直川廃寺、西区分廃寺にみられ、田名草郡にその分布が顕著であるが、軒平瓦B I、隅木蓋瓦の類例が隣接する那賀郡の西国分廃寺で確認されており、伊都郡4ヶ寺の薬師寺系軒瓦の共通性、那賀郡3ヶ寺の取田寺系軒瓦の共通性の中で、草名郡の上野廃寺と那賀郡の西国分廃寺の関連性が注目されている。

伽藍の特徴について述べてみよう。伽藍の配置は地形の制約を受けているとはいえ週廻り金堂の背後を廻り金堂西の講堂にとりつく。つまり、伽藍中車は一堂二塔形式であったことが明白である。伽藍の地割計画については東西両塔の芯塔距離40.65 mを2等分する20m強が伽藍配置上の単位であったようで、唐尺の約70尺にあたることも考えられる。各堂塔の柱間なども高麗尺よりも唐尺寸法に近いようである。

各堂塔のうち東西両塔については東塔が西塔よりやや大きい構造をもつもので、柱間寸法では東塔の約

218 cm等間が西塔の約210 cm等間を渡している。また、これにともない茶椀も一まわり大きく、茶室縁の化粧も、河内田辺麩寺にもみられるように西塔の瓦積みと較べ東塔は1階積みとしている点など東塔上位の較差に注意せねばならない。

講堂跡で検出した本尊台座遺構をとともう須弥壇遺構は近年明らかにされつつある古代寺院の須弥壇に新資料を投じたが、とくに、滋賀県穴太庵寺の再建講堂の須弥壇遺構との類似性が注目される。

伽藍の維持・管理については蒸し替えの軒平瓦や樋目印瓦を残す平瓦などがその経過を示している。このほか、講堂左右の取り付部廻廊は講堂北部で創建期の素洲排水溝を連れて建築しており時代が下ることは明らかである。使用された小型の瓦類のうち、丸瓦については紀伊国分寺鐘樓塔で同一工場で生産とみられる丸瓦が出土し、8世紀後半から9世紀後半に比定できるものである。上野麩寺にあっても、創建からやがて時を経て、かなり大規模に廻廊の増築が実施されたようである。

法灯の所在地は、伽藍、なかでも講堂跡からもっとも多く出土する灯明皿に用いられた土師器類がこれを示す。これらには、いわゆる「手法」が用いられており10世紀後半代までは法灯が保たれていたことがわかる。

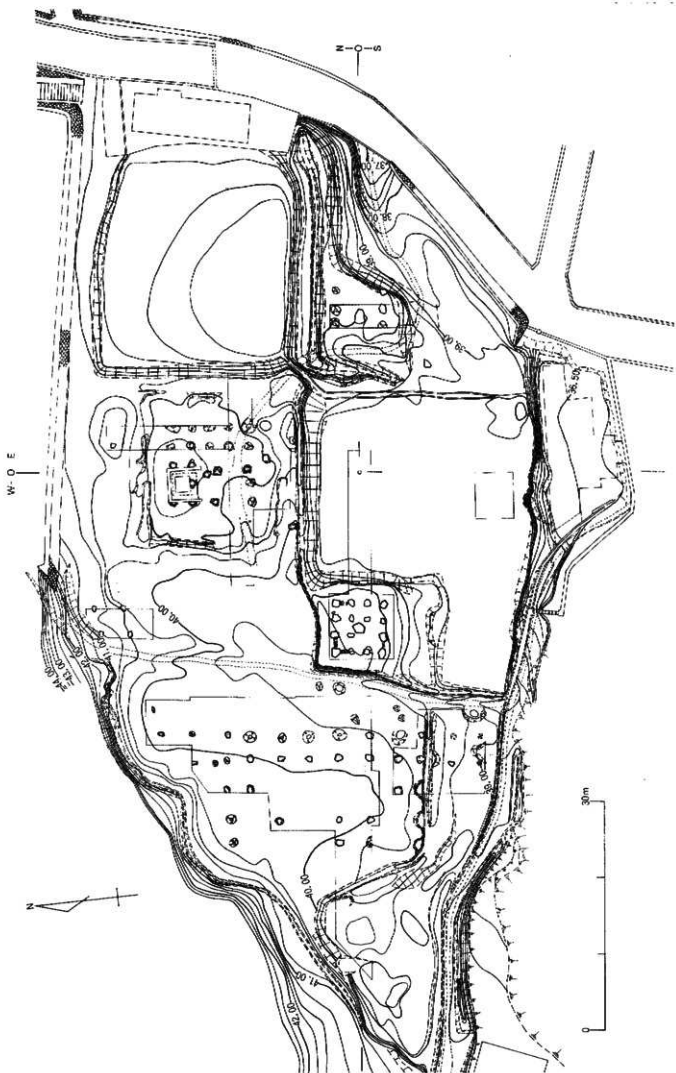
最後に、7世紀の第4四半期のある時期に法隆寺や朝鮮半島南部の影響を受けつつ上野麩寺を建立した者は誰であったろうか。不幸にして確かな文献史料がない今、これを断定することはできないが、その可能性を、紀伊国出土とみられる、深師寺僧景戒が嵯峨天皇の弘仁年間にあらわした「日本靈異記」に求めてみよう。仏教説話集である「日本靈異記」は編者景戒の出自から紀伊国に関する人物・地名などの信憑性が高いもので、その下巻第三十に「老僧觀規は、俗姓は三間名の千坂なり。……中略……先祖の造れる寺、名草の郡の能応の村にあり。名を弥勒寺と曰ふ。宇を能応寺と曰ふなり。……」とある。野応村は、従来、和歌山市山口に比定されてきたが、最近の研究では山口の西方、和歌山市上野塚辺との考えが優勢である。すなわち、上野麩寺の所在地である。三間名の觀規は任那半島であり、靈異記からは渡来人の後裔であることがうかがえ、その祖先が新羅系の軒瓦を用い双塔寺院であった弥勒寺、すなわち上野麩寺を建立したことは十分考えられることである。

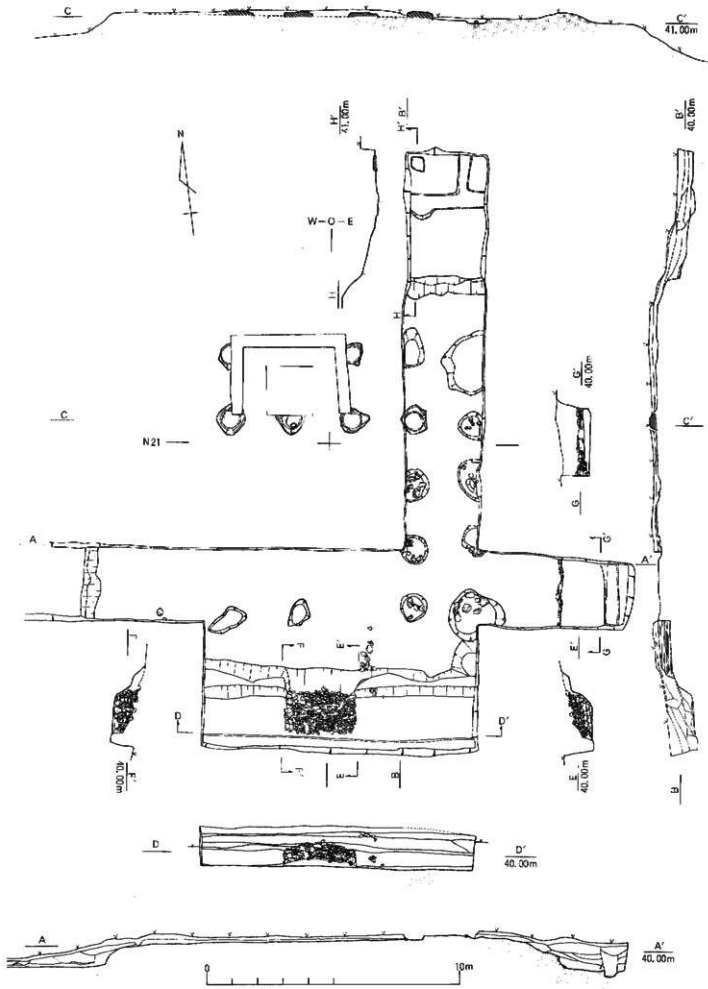
しかし、そうとすれば、上野麩寺は觀規の先祖が建立した氏寺との性格づけがなされることになり、県下の古代寺院建立の経緯が明らかでないいまは、やはり、可能性にとどめざるを得ないであろう。

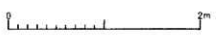
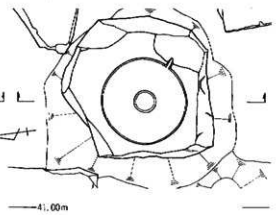
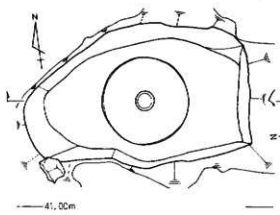
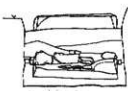
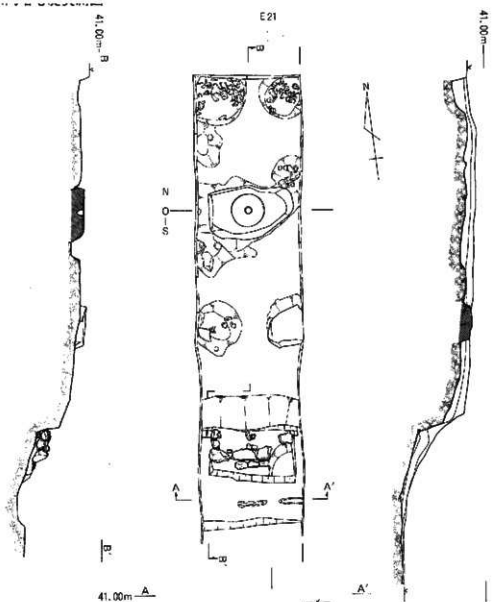
註

- 註① 稻垣昌也「和歌山県下出土の新資料三例」仏教芸術142号所収 昭和57年
註② 稻垣昌也「古代の陶木蓋瓦」藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢所収 昭和58年
註③ 森 聖夫「上野麩寺の発掘調査」仏教芸術142号所収 昭和57年
註④ 奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会編集「法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書」 昭和60年
註⑤ 奈良県教育委員会「藤原宮(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊)」 昭和44年
註⑥ 朝鮮古蹟研究会「慶州千軍里庵寺址(昭和13年度古蹟調査報告)」 昭和15年
註⑦ 紀伊風土記の丘管理事務所「紀伊風土記の丘第5号」 昭和53年
註⑧ 桃野眞見・保井保夫・久保 健「和歌山県の古代寺院跡 仏教芸術116号所収 昭和52年
註⑨ 和歌山県教育委員会「佐野麩寺発掘調査報告」 昭和52年12月
註⑩ 和歌山県教育委員会「最上庵寺発掘調査報告書」 昭和59年11月
註⑪ 大阪府教育委員会「田辺庵寺発掘調査概要」 昭和47年
註⑫ 大崎信也・伴川 清「滋賀県穴太庵寺」月刊文化財No.257 昭和60年
註⑬ 藤井保夫「紀伊国分寺跡出土の瓦」和歌山の研究1所収 昭和54年
註⑭ 安藤昭一・五来 重監修「和歌山県の地名」 昭和58年

图 版

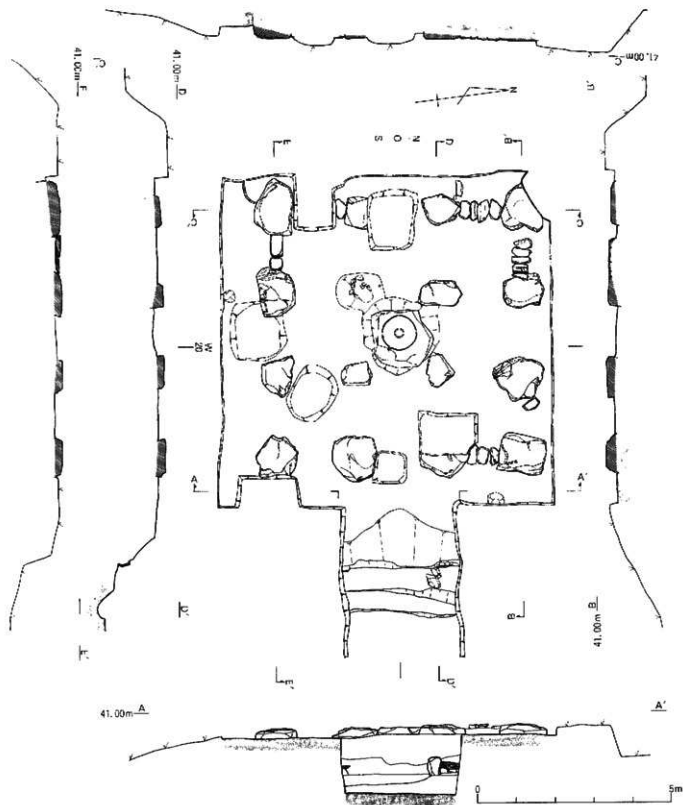


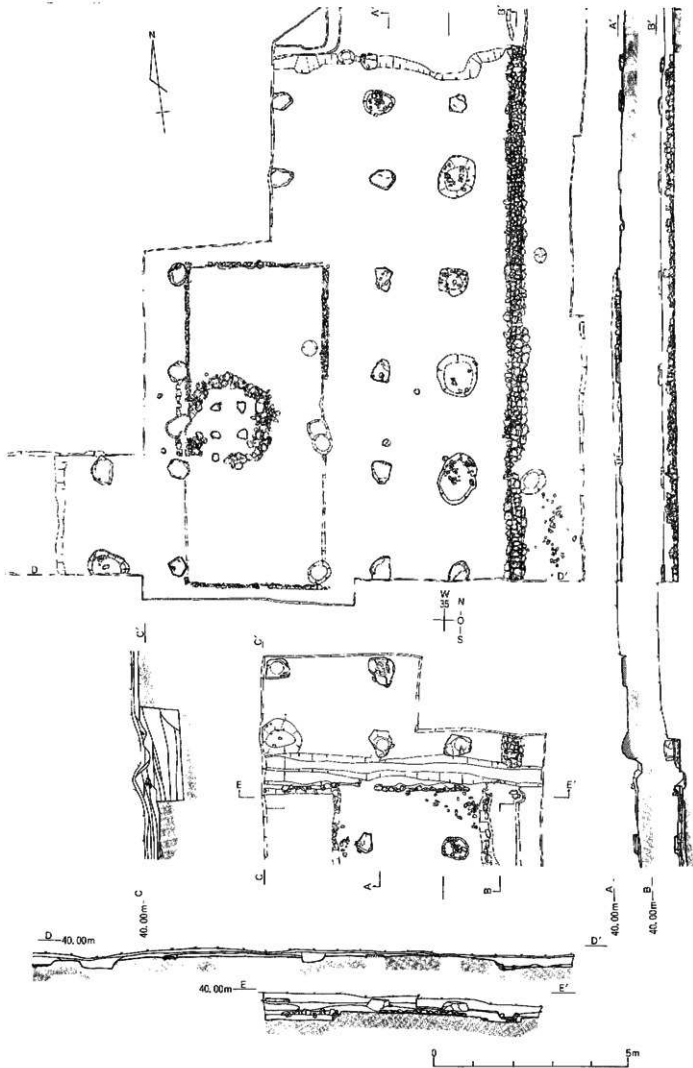


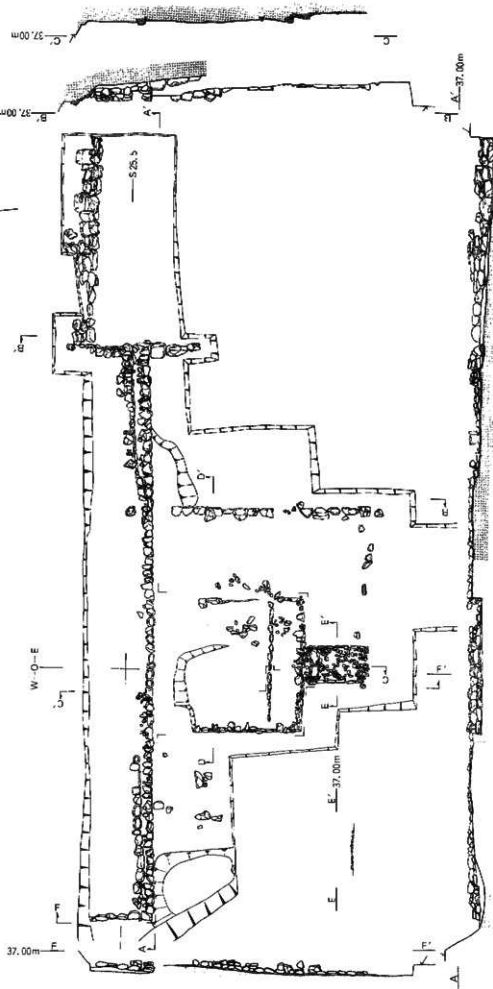
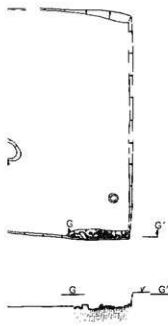
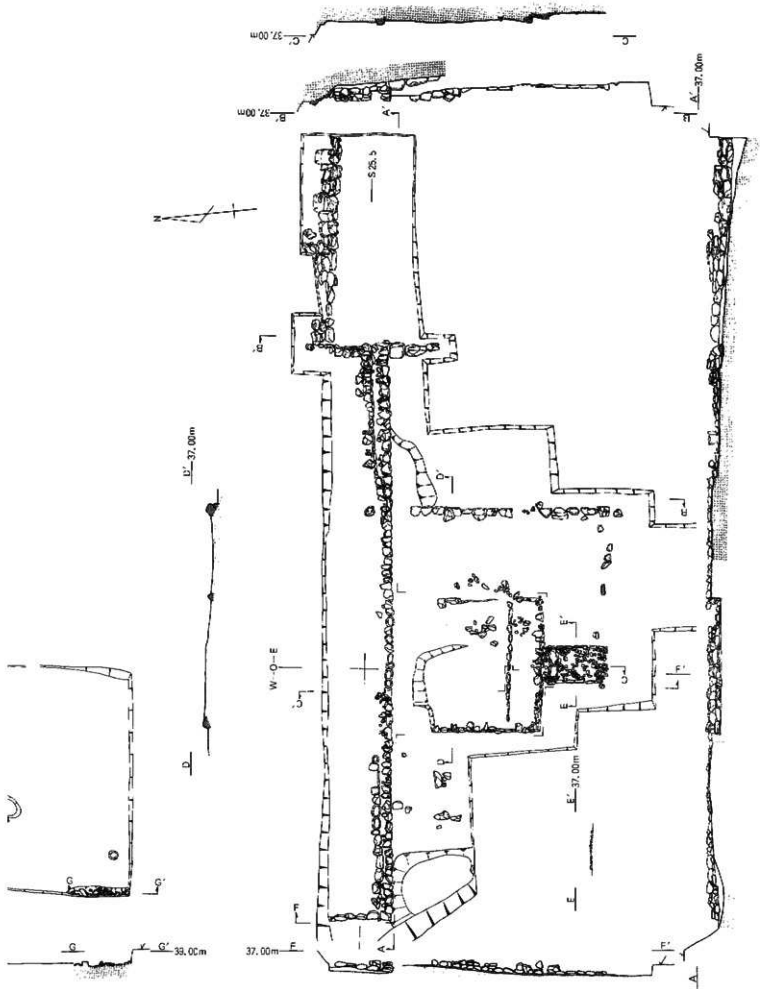


東塔心礎

西塔心礎

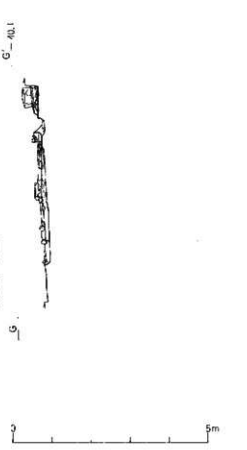
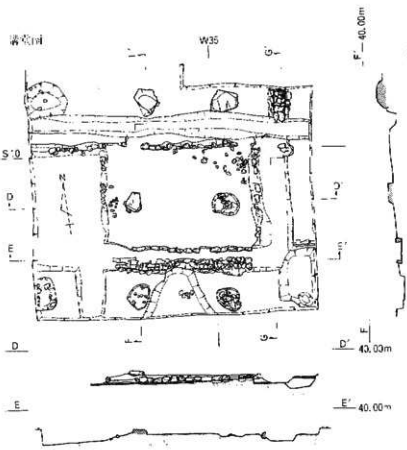
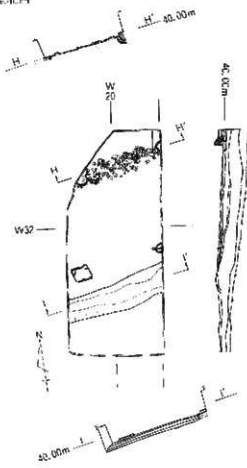
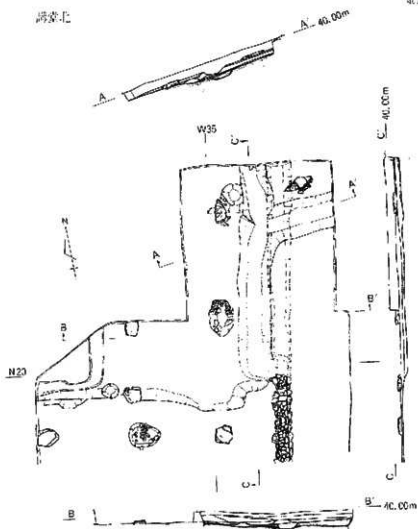






湖岸上

金堂北西





1. 周辺地形
(昭和41年9月)



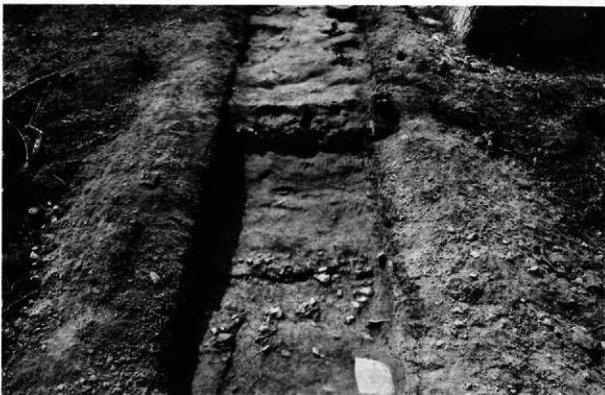
2. 金堂跡
(東より)



1. 正面階段
(西より)



2. 正面階段
(南より)



3. 基壇北面
と廻廊

1. 礎石



2. 基壇東面



3. 基壇版築周辺



1. 心礎と正面
階段



2. 心礎と礎石
抜取り穴



3. 正面階段
(西より)





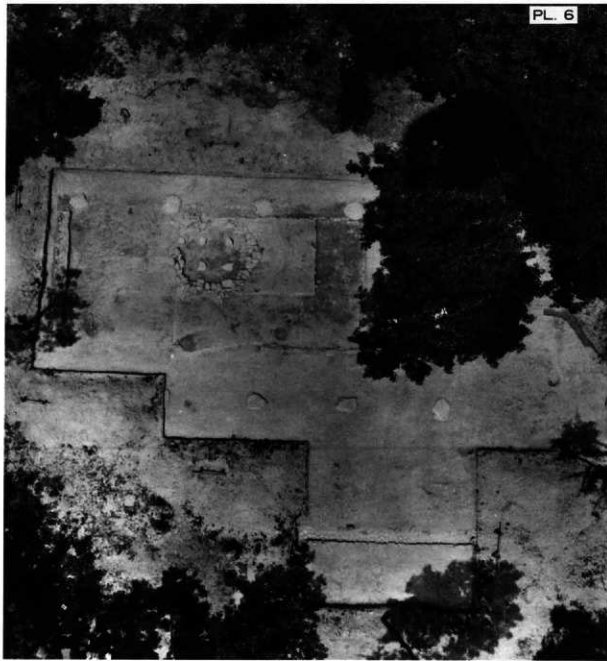
1. 全景 (東より)



2. 礎石検出状況
(北より)



3. 東階段



1. 須弥壇周辺



2. 東南落溝・礎石等検出状況



1. 東雨落溝



2. 礎石等検出
状況



3. 基壇西面と
雨落溝



1. 北面と廻廊



2. 北東隅雨落溝



3. 南面と廻廊



1. 須弥壇全景
(垂直写真)



2. 須弥壇全景
(南より)



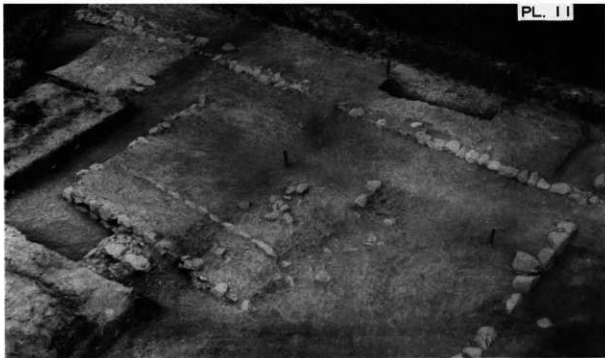
1. 須弥壇全景
(正面, 東より)



2. 本尊台基基礎



3. 須弥壇縁細部



1. 基壇縁南面
と階段



2. 基壇縁南面
(西より)



3. 基壇縁東南部
(東より)

1. 講堂北部とり付
(東より)



2. 講堂北部とり付
(北より)



3. 講堂南部とり付
(東より)



1. 中門東とり付
部石垣
(写真右半)



2. 金堂北側の礎
石と雨落溝



3. 礎石雨落溝・
地覆 (金堂北
東部) 廻廊





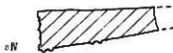
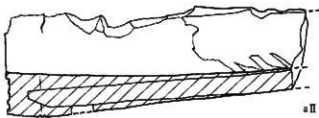
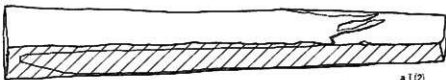
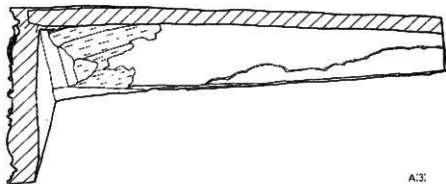
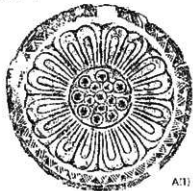
1. 本堂灯籠跡



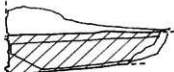
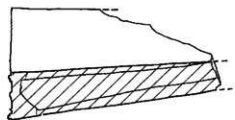
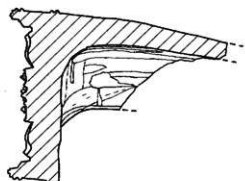
2. 講堂北部基
掘排水溝



3. 中門南縁階
段と参道



a V



軒九瓦・軒半瓦摺本実測図





A (1)



a I (1)



a II



a III



a IV



B



b I



b II

軒丸瓦細部



A(1)



A(2)



A(1)



A(3)



1:4



B

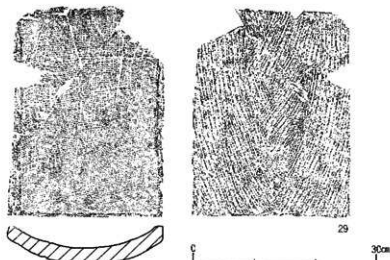
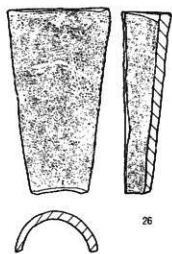
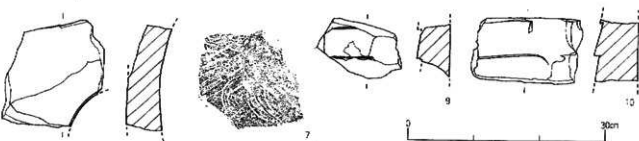
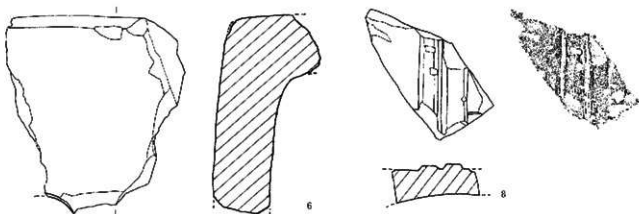
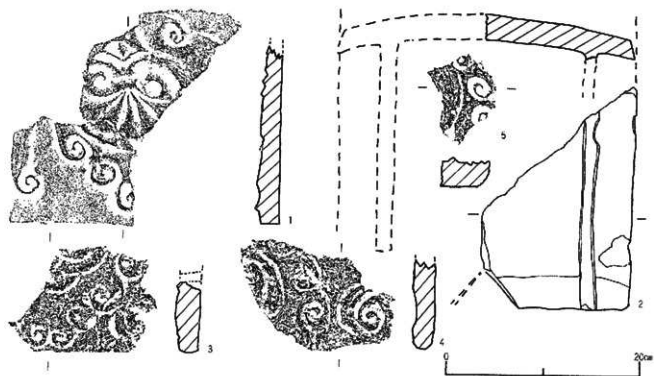
軒平瓦細部



1:4



A(2)



軒平瓦細部



a I (1)



a II



a IV



a I (2)



b I



b II

1:4

隅木蓋瓦



1



2

1:4

鴟尾



6



7



8

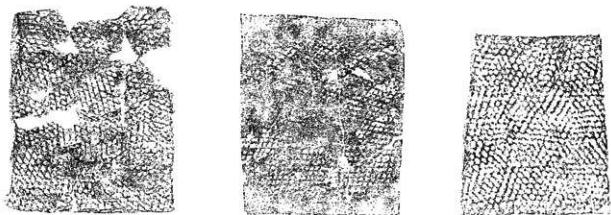
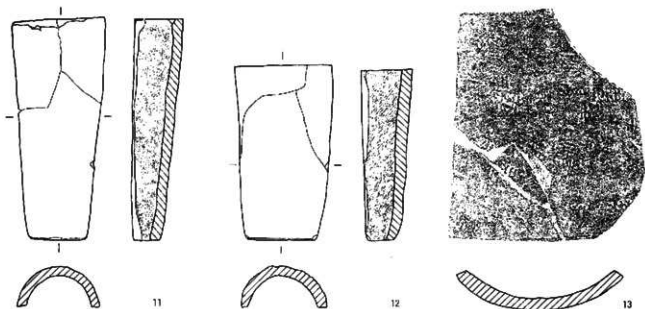


9



10

1:5



丸瓦



1:6

11

12

平瓦



14

15

16



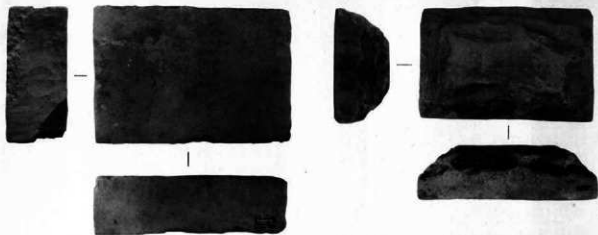
1:6

17

18

19

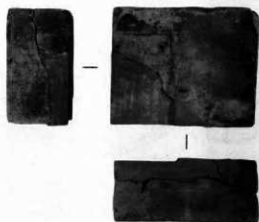
塙



20

21

1:7



差し替え瓦

1:4

23

22



24



26



27

廻廊の瓦



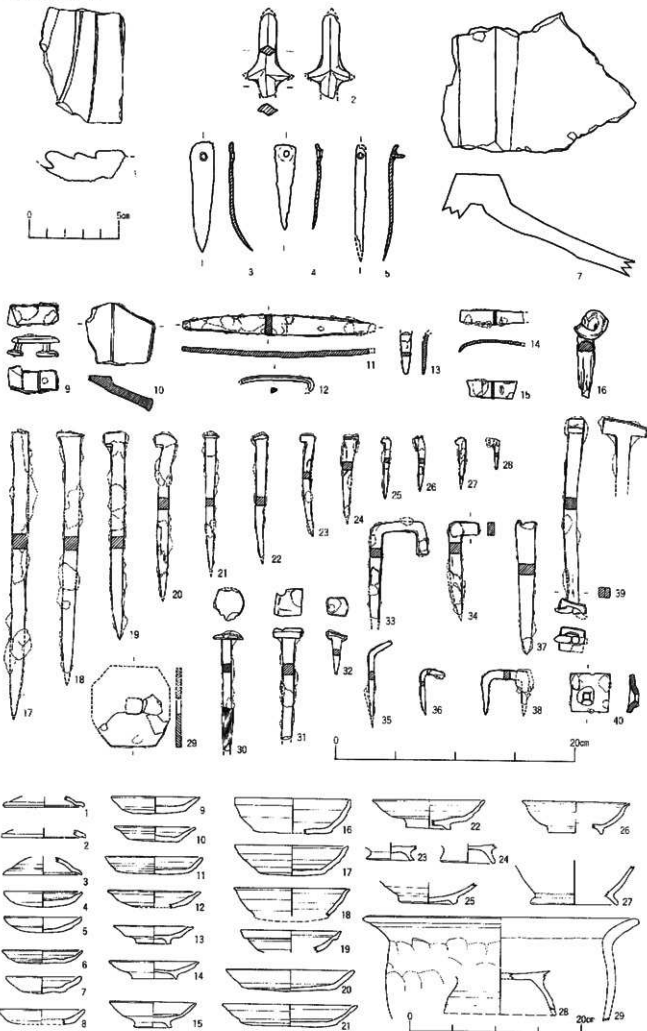
28



30



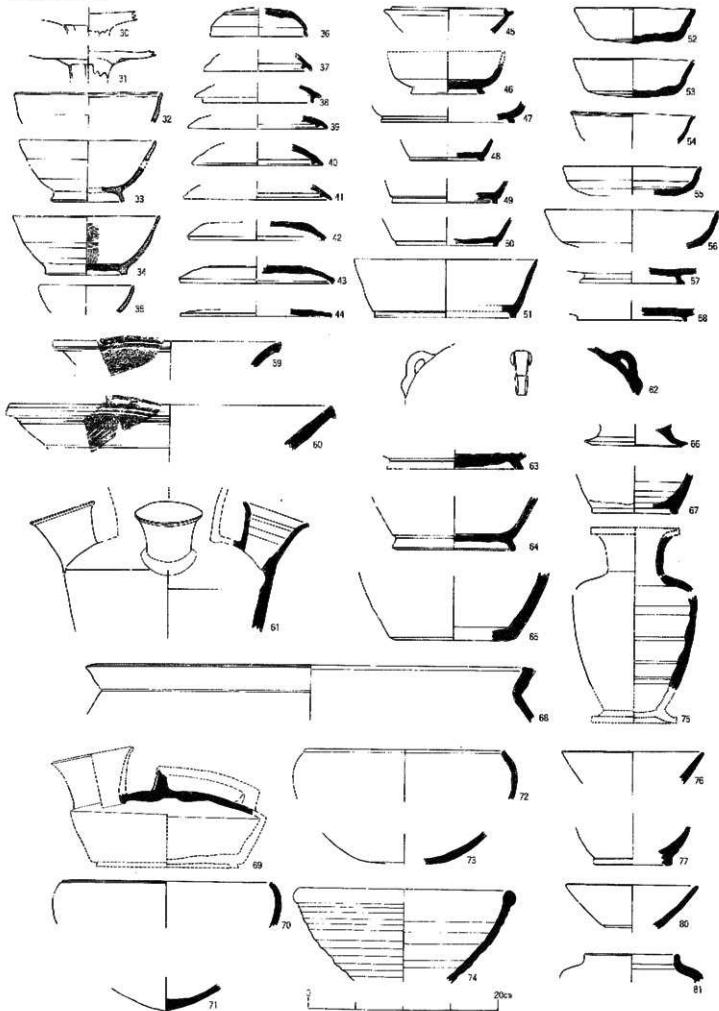
1:6



仏像・金属遺物・土師器実測図



1:1
1-5, 8, 9
1:2
6-7, 16-39



土師器
黑色土器



4



13



20



9



15



22



10



16



26



11



17



34

須恵器
緑釉ほか



36



39



45



46



52



53



55



69



61



76



78



80



77



79



81



75

昭和61年3月25日 印刷

昭和61年3月31日 発行

上野廃寺跡発掘調査報告書

著作権
所有者 和歌山県教育委員会

発行者 和歌山県教育委員会

印刷者 有限会社 真陽社